

4) 両生類

①概説

青森県では2000年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－」を発行している。この中の両生類分野ではCランクにクロサンショウウオの1種を選定しているだけであった。その後、県内の自然環境変化の進行に伴いレッドデータブックの見直しを行い、2006年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－」を発行した。この中で両生類分野も見直しているが変更がなかった。今回の見直しではCランクのクロサンショウウオはそのまま、新しくトウホクサンショウウオとアカハライモリをCランクに選定する結果となった。また、Dランクにカジカガエルを新しく選定した。全体として選定種が1種から4種に増加する結果となった。

クロサンショウウオについては以前から津軽地方には産卵場所が比較的多く知られていて、南部地方からは少なかった。この状況は変わっていないが、南部地方の既知産地の中には現在は確認されなくなった地域もある。本種はトウホクサンショウウオと同じく止水域に産卵するが、比較的大きな池沼に多数の個体が集中して産卵する傾向がある。今回新しくCランクに選定したトウホクサンショウウオは、かつて県内各地の山地や水田、山道の側溝などの狭い止水域に広く産卵が見られた。しかし、既知産卵地点が減少し、成体の生活場所である陰湿な林床も減少していることから個体数減少が懸念されている。同じく、今回の見直しで新しくCランクに選定されたアカハライモリは、かつては県内各地の水田や人里周辺の池沼で普通に見られ、子ども達の遊び相手でもあった。しかし、現在では人里の水田や池沼では見つけることが難しく、農耕地から離れた山地の池沼でないと生息確認が難しくなっている。

県内のカエル類はこれまでレッドリストに選定された種はなかったが、今回の見直しではカジカガエルをDランクとした。これはかつての県内各地の河川において中流域でもカジカガエルの鳴き声が聞こえていたが、最近はかなり上流域でないと確認できないなど生息域減少が顕著なことによる。本種の産卵地点は溪流が普通であるが、本県では全国的にも珍しい止水域になる湖沼環境で繁殖し、十和田湖では繁殖地点の減少が報告されている（笹森・山崎，2009）。また、溪流や湖岸で産卵し、幼生がそこで成長することは明白だが、変態後の生活状況の知見は少ない。樹上生活を示唆する報告がある（向山，1996）が、越冬地点などを含めて周年にわたる知見集積が期待される。

県産カエル類の中でトノサマガエルとツチガエル、シュレーゲルアオガエルの3種についても生息確認地点の減少が一部で指摘されている。今後の動向観察が必要である。現在の県内生息種として認めるには問題があるが、和田（1939）に記録されているオオサンショウウオとニホンアカガエルについても注目しなければならない。このうちオオサンショウウオは現在の自然分布が西日本に限られることから飼育個体の逸出と見られる。ニホンアカガエルについては岩手県と秋田県には現在でも局地的ではあるが生息している。また、県内産の標本が現存しなく、同定上の特徴を明瞭に捉えた写真が残されていないが、目撃情報は近年でも見られる。

両生類はいずれも幼生時代は水中でえら呼吸し、成体になると肺呼吸に変わるが体表呼吸の占める割合が大きいことから皮膚が常に湿っている。そのために、水田耕作の乾田化、農薬汚染、湿地や林床の乾燥化、草地の裸地化などの環境変化に弱いとされている。県内における両生類の生息環境を考えると今後懸念されることが多い。今回の選定種はもちろんだが、選定種以外についても注意深い観察が期待される。

（向山満）

②本文

サンショウウオ目 サンショウウオ科

C

和名 クロサンショウウオ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hynobius nigrescens* Stejneger

日本固有種で本県が北限。成体の全長は13cmくらいで、背面は暗褐色から暗緑色で腹面は色が薄い。小さい青白色の斑点を密に散布する。同所的に見られるトウホクサンショウウオと酷似するが、成体ではサイズが大きいこと、尾長が長く全長の半分程度であること、尾端が扁平であることなどから識別できる。本種の卵嚢は白濁するので違いが明白である。幼生の識別はたいへん難しい。

県内分布は津軽地方には比較的広く生息するが、南部地方の確実な記録は少ない。池沼などの止水域が産卵場所で、近年は産卵に適した水域の環境変化が進んで減少傾向にある。産卵期以外は周辺の林床に分散し、小動物を捕食しているため付近一帯の湿潤な森林の環境保全が重要である。

(向山満)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

C

和名 トウホクサンショウウオ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hynobius lichenatus* Boulenger

日本固有種で本県が北限。成体の全長は10cmくらいで、背面は茶褐色で腹面は色が薄い。小さな青白色の斑点を密に散布する。同じ止水域に産卵するクロサンショウウオ成体とは酷似し識別が難しい。しかし、成体のサイズがより小さいこと、尾長が短く全長の半分より短い、四肢が短いなどから識別できる。本種の卵嚢は透明で内部に球形の卵が見えるので両種の識別は容易である。

産卵期には県内各地の池沼、道路端の水たまりなどで卵嚢が見られたが、近年は減少傾向が目立っている。産卵期以外は周辺の林床に分散し、小動物を捕食しているため付近一帯の湿潤な森林の環境保全が重要である。前掲のクロサンショウウオも含めた全県的な定量的調査が期待される。

(向山満)

サンショウウオ目 イモリ科

C

和名 アカハライモリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cynops pyrrhogaster* (Boie)

日本固有種で本県が分布の北限。雄成体の全長は10cmくらいで雌はやや大きい。背面は一様に黒くて縦に細長く隆起した線が走っている。腹面全体に不規則な赤色斑紋が広がっている。俗称のアカハラはこの斑紋に由来する。繁殖期の雄の尾は紫色を帯びる。

かつては津軽地方、南部地方ともに池沼や水田などの止水域に広く分布していたが、近年は見つけることが難しくなった。両生類の体表は常に湿っていることが欠かせなく、また、本種は産卵期以外にも水中生活を送ることから農薬散布の影響を受けやすいと考えられる。早急に全県的な定量調査の実施と正確な現況把握をした上で生息環境の保全対策を急ぐ必要がある。

(向山満)

和名 カジカガエル

学名 *Buergeria buergeri* (Temminck et Schlegel)

環境省：該当なし

日本固有種で本県が分布の北限。体長は雄が4 cmくらい、雌が6 cmくらいである。産卵は河川流水の石の下で、流水中に産卵するカエル類は本県唯一である。体色は灰褐色で不規則な暗色斑紋がある。

本県では河川上流部の溪流に広く分布していたが、近年は生息域がより上流部に限定されつつある。しかし、その実状は調べられていない。また、本県における産卵期以外の生態知見はほとんどなく、精査が必要である。

(向山満)

③引用文献

- 向山 満 1996. かすみ網にかかったカジカガエル. 青森自然誌研究, 1: 41.
笹森耕二・山崎竹春 2009. 十和田湖湖岸におけるカジカガエルの繁殖について. 青森自然誌研究, 14: 14.
和田千蔵 1939. 青森県博物総目録有脊椎動物編. 青森博物研究会会報, 8/9: 1-28.